

日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義：『異文化 間教育論』受講者のコメント分析から

著者名(日)	高橋 亜紀子
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	40
ページ	15-25
発行年	2005
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000013/



日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義

——『異文化間教育論』受講者のコメント分析から——

*高 橋 亜 紀 子

Class for Promoting Interaction and Understanding between Japanese Students and International Students
— Based on the Analysis of Students' Reflections on "Intercultural Education Class" —

TAKAHASHI Akiko

Abstract

日本は、多文化共生の時代を迎えつつある。この時代を担う日本人学生にとって、異なる文化を背景とする人々と実際にコミュニケーションをする中で生じた摩擦や葛藤などについて考えるという体験は必要なことではないだろうか。そこで、「異文化間教育論」では、日本人学生と留学生との混成グループによる討論を中心とした授業を行った。本稿では、日本人学生及び留学生の討論に関するコメントを分析することによって、双方が何を学んでいたのかを明らかにし、日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義について検討する。

Key words : 異文化間教育 (Intercultural Education)

異文化理解 (Understanding Culture)

相互交渉 (Interaction)

留学生 (International Student)

日本人学生 (Japanese Student)

1. はじめに

平成16年度末での日本における外国人登録者数は、過去最高の197万3,747名で、日本の総人口の1.55%を占めている。国籍は188カ国を超えており、日本は、多民族・多文化社会へと進行しつつある。この傾向は、少子・高齢化が進めば、さらに強まるものと予想される。国内の労働力不足を確保し、国内の産業や経済を活性化させていくためには、外国人労働者の受け入れを拡大せざるを得ないという現実が目前にあるからである。

日本は様々な国籍の人々と共に暮らす多文化共生社会へと移行しつつある。この社会の一員として、私た

ちには、異なる文化の人々を排除することなく、お互いに尊重し、理解し合いながら、共に暮らしていこうという姿勢が求められるのではないだろうか。

本学に目を向けてみると、留学生は、2005年4月1日現在で98名と、学生総数の約5.7% (約17人に1人) を占めている。彼らの大半が中国や韓国からの留学生である。外見上は日本人と大きく変わらないため、日本人学生の多くは、学内の留学生の存在に気づかないことが多い。

筆者は、これまで留学生の日本語教育に携わってきた。クラスで、留学生から「日本人と話す機会がない」「日本人の友達ができない」「日本人グループの中に入りにくい」「日本人学生は留学生に興味がない」など

* 国語教育講座

の訴えを何度となく聞いてきた。一般に、日本語の授業は、留学生のみを対象として行われるため、日本人学生と共に学ぶ機会はほとんどない。そのため、教室外の日本人と交流する機会を設けるなど、教室内の留学生と教室外の日本人や日本社会とをつなぐ工夫をしてきたものの、まだ十分とは言えない。

一方、日本人学生の中には留学生との交流に興味を示さない学生もいるが、積極的に交流をしたがっている学生や「留学生と話してみたいけれども、何を話せばいいのかわからない」というように、興味はあるが、接点をみつけられない学生もいる。

では、なぜ、留学生も日本人学生も同じ学内にいながら、交流する機会がないのだろうか。その理由として、日本人学生が留学生の存在を認識していない、お互いの存在を認識していても関わるきっかけがない、両者の授業は別立てである、などが考えられる。

この日本人学生と留学生の関係は、日本社会に暮らす日本人と外国人の関係の縮図のようには見えないだろうか。相手の存在に全く気づかない人もいれば、お互いに興味を持てはいても、接点がないために交流する機会がない、交流してみたいという気持ちはあっても、何から始めればよいのかが分からず、きっかけを待っている人もいる。

本学は教員養成大学であり、卒業して教員になる学生も多い。教員になれば、教育現場で国際理解教育や外国人児童生徒の日本語教育などを担当する可能性もある。また、教員以外の職に就いても、自分の住む地域で外国人と共生していくことは現実的な課題となる。私たちは隣人である外国人と一切関わり合いを持たないのではなく、関わり、支援できる存在として社会に貢献する必要があるのではないだろうか。そのためには、まず、異なる文化を背景とする人々を知り、彼らの文化に接して戸惑いを感じたとすればどのように対処したらよいのかを体験してみることが大事である。

言いかえれば、日本人学生にとっては、留学生と直接に接する機会を持つことが、近い将来、地域の隣人として外国人と接する際の抵抗感をなくすことにもつながるのではないだろうか。一方、留学生にとっても、日本人学生と接することは、日本人や日本社会、日本文化への理解を深めるという意味がある。そこで、2003年度から「異文化間教育論」という講義の中で、日本

人学生と留学生とが会うきっかけ作りを行ってきた。

本稿では、2005年度（3年目）に行った実践を報告し、日本人学生と留学生がそれぞれ何を学んでいたのかについて、彼らの書いたコメントを分析し、共に学ぶことの成果と問題点、共に学ぶ意義について考察する。

2. 授業の概要

2.1. クラスと受講者

「異文化間教育論」は、学部学生を対象として前期に開講される自由選択科目（2単位）である。受講する学生は、主に、国際文化専攻の学生である。

同じ専攻の学生が多いため、グループ分けにあたって、専攻以外の要素を利用することにした。そのため、出身県や海外経験、趣味、興味を持っていることなどを授業開始時に調査した。また、できるだけ多くの留学生に声をかけ、多様な国籍の留学生に参加してもらった。

2005年度前期に受講したのは、日本人学生22名と留学生9名の計31名である。

日本人学生の内訳は、専攻及び学年別では、国際文化2年19名、3年2名、生涯教育2年1名である。出身県別にみると、宮城14名、福島2名、秋田1名、青森2名、岩手3名であった。海外渡航歴は、「有り」が8名で、「無し」が14名であった。渡航目的は、観光2名（渡航先：グアム、イギリス、オランダ、ドイツ、マレーシア、台湾）、中・高生時の研修に参加2名（アメリカ、オーストラリア）、本学の海外総合研修に参加3名（オーストラリア）、その他の研修に参加1名（韓国）であった。趣味や興味を持っていることは多様であり、ここでの記述は省略する。

一方、外国人留学生の内訳は、国籍別では、韓国5名、オーストラリア2名、中国1名、台湾1名。学籍別では、学部生3名、特別聴講生5名、科目等履修生1名であった。

2.2. 受講者のニーズ

この授業を受講する受講者のニーズを知るために、授業開始時に、学びたいと思っていることを、調査用紙に自由に記入してもらった。

結果は、以下の通り。() は人数を示す。

〔日本人学生〕

- ・自分の知らないことを発見したい (7)
- ・異文化の人との接し方を知りたい (6)
- ・外国と日本との違いを知りたい (7)
- ・異文化で生じる誤解や摩擦、問題を知りたい (5)
- ・文化と文化を比較したい (2)
- ・留学生と仲良くなりたい (2)
- ・自分自身を見直したい (2)

〔留学生〕

- ・日本人と友達になりたい (2)
- ・日本人と話して日本の生活や文化を知りたい (2)
- ・日本人が留学生のことを実際にどう思っているのか知りたい (2)
- ・他国の文化や考え方などを知りたい (2)

この結果から、留学生は日本人と直接話したいと思っているのに対し、日本人学生は、留学生を対象として挙げるといよりは、文化の違いやそこから生じる誤解や問題などについて知識として知りたがっていることが分かる。

2.3. 授業の目標

箕浦 (2000) は、日本人学生と留学生が同じ場と時間を共有することは相互交渉の前提だが、相互理解には意味ある活動が共同でなされて葛藤や成就感などの情動をともなった経験をする必要があると述べている。

そこで、この講義では、教師からの一方的な講義形式ではなく、日本人学生と留学生とで構成するグループで、様々なトピックについて討論し合いながら、相互理解を促すことを目標とした。

なお、トピックは、受講者の身近なもので、実際に体験を通して学べるものを中心に取り入れた。これは、体験した後に、体験中に自分の中で起こったことについて振り返るすなわち、内省することで、受講者に様々な気づきを促したいと考えたからである。そのため、受講者には、毎回の授業の後で体験を振り返るコメントを書いてもらった。

グループ構成は、日本人学生 2、留学生 1 の 3 名を基本とし、メンバーは毎回入れ替えた。学期末に行う発表及びレポート作成のためのグループは、3～4 名で、授業内のグループとは別途に構成した。

授業の概要は、「異なる文化を背景とする人々とのコミュニケーションについて考えます。異文化とは何か、異文化を理解するとはどういうことなのかについて、実際に考え、体験することを通して学びます。異文化間コミュニケーションに関する知識や視点を身につけ、異文化間摩擦を克服する手段について考えます。」である。

また、受講の心得として、「この講義は、教師側からの一方的なものではありません。みなさん自身が自発的に考え、積極的に交流することを通して学ぶという姿勢で参加してください。授業の最後には、自分が感じたことや考えたことを必ず書いてください。また、グループワークでは、異文化間交流を実践していくために、なるべく普段あまり接していない人とのグループを作るようにしてください。」という指示をした。

2.4. 授業の内容 (シラバス)

本授業は、2005年 4 月から 7 月までに、合計 15 回行った。授業の内容は、表 1 の通りである。

なお、内容を考えるにあたっては、徳井 (2002) と八代他 (1998, 2001) を主に参考にした。その他、金田一 (2003)、田尻 (2004)、星野 (2003)、むさしの参加型学習実践研究会 (2005)、山田 (2001)、各種新聞記事や統計資料なども教材として取り上げた。

2.5. 評価

評価は、出席 30%、授業態度 20%、発表 20%、期末レポート 30% とした。なお、発表と期末レポートは、グループで作成することとし、各自の分担箇所は明示してもらった。

3. コメントの分析

3.1. 分析の方法

ここでは、1～10 回の各授業後に、受講者が授業で考えたり感じたりしたことを書いたコメントと、学期末に行った授業全体についてのコメント、グループ発表についてのコメントの 3 種類を資料として、そこから得られた知見について考察する。なお、講義を教師と受講者間で双方向性を持たせるため、教師は受講者のコメントに目を通し、それに対して何らかの返答コメントを記し、次の授業で返却した。

表1 内 容 (シラバス)

回	月/日	学 習 項 目	教 室 活 動
1	4/8	オリエンテーション クラスの雰囲気作り①	①仲間探し (ジェスチャーだけで仲間を探す) ②自己開示 (自己開示の度合いを知る) ③初対面の話題 (外国人と日本人の会話例から特徴を考える)
2	4/15	クラスの雰囲気作り② ステレオタイプ①	①部屋の四隅 (同じ嗜好を持つ人と知り合う) ②ステレオタイプ (各自のイメージをグループで話し合う)
3	4/22	ステレオタイプ② 常識	①ステレオタイプのまとめ (前回の活動を振り返る) ②常識とは何か (常識とその背景を、グループで話し合う)
4	5/13	文化①	①文化の定義 (各自が定義を考え、グループで話し合う) ②学校文化「給食」「家庭訪問」(留学生に日本の学校文化を紹介する)
5	5/20	文化② 日本の国際化①	①日本にいる外国人児童生徒とその問題 (指導助手の留学生の体験や問題点を聞く) ②文化の力関係「日本では日本式にすべきか？」 (南米の子どもの事例について、グループで話し合う)
6	5/27	日本の国際化② 異文化との接触①	①日本にいる外国人と生活上の問題 (調査結果について調べ、留学生の体験談も聞く) ②異文化への態度 (必要となる態度やスキルなどについてグループで話し合う)
7	6/3	異文化との接触② コミュニケーション①	①カルチャーショック (留学生の体験を聞くだけでなく、自分の体験を振り返る) ②流れ星 (伝え手と受け手との役割を考える課題) (コミュニケーションとは何かについて、グループで話し合う)
8	6/10	コミュニケーション②	①コミュニケーションのまとめ ②日常生活で起こりうる誤解や問題 (留学生が日本で感じた違和感について聞く)
9	6/17	外国語による コミュニケーション	①外国語で生活する苦勞・体験談 (留学生の体験を聞く) ②母語と外国語によるストーリーテリング (母語と外国語で絵の説明をし、感じたことを話し合う)
10	6/24	非言語による コミュニケーション	①非言語コミュニケーションの特徴 (特徴を知るとともに、留学生に実際にインタビューをする)
11	7/1	グループワーク①	グループで発表の準備①
12	7/8	グループワーク②	グループで発表の準備②
13	7/15	発表会①	グループ発表と評価 (発表を聞き、評価シートに記入する)
14	7/22	発表会②	グループ発表と評価 (同じ)
15	7/29	発表会③ まとめ	グループ発表と評価 (同じ) 授業の振り返り (コメントシートの記入)

集まったコメントを集計したところ、コメントは31名297個であった。この中から実践の振り返りに頻出した表現や重要と考えられる表現(260個)を選び、類似性や関連性に配慮して分類を行った結果、15項目にまとめることができた。以下、順を追って解説する。受講者のコメントの中で、留学生の書いた日本語の誤りは、原文を尊重しつつも、意味が分かりにくいものについては修正を施した。また、コメントを書いた本人が特定される可能性がある部分については修正または省略して示す。

3.2. 分析の結果と考察

3.2.1. 面白い

抜き出した表現のうち65個に、「面白かった」「興味深かった」「楽しかった」「うれしかった」など、活動を興味深くとらえているコメントが毎回見られた。

日本人学生からは、「普段留学生の話聞く機会がな

かったので面白かった。」「留学生の出身国が偏っていませんでしたので、いろいろな意見・考えが聞けて面白かった。」「留学生のみんなにいろいろなジェスチャーをインタビューしてみて、面白い発見がありました。」などのコメントが多い。これらは、3種類のコメントすべてに見られたものである。このことから、日本人学生は留学生と直接話をするることによって、様々な刺激を受けながら、楽しく学んでいたと考えられる。

一方、留学生からは、「日本に来てから感じたいろいろなことについて組の人と話し合ってみて面白かったです。」「日本人との話し合いは楽しかった。」のように、日本人学生と話せたことを喜んでいるコメントが多い。

このほかに、「うれしい」という記述が10個あった。日本人学生からは「留学生から直接異文化についての話が聞けてうれしかった。」という2個だけで、それ以外はすべて留学生からのコメントであった。

具体的には、「日本人の性格にもアプローチできたし、自分のこともみんなに理解してもらえたし、うれしく、ありがたい。」「自分の国に興味を持ってくれてうれしい。」「今日はみんなの母語じゃない言語で苦手な部分を聞いて、私の日本語の苦手な部分と同じだと分かり、うれしかった。」などがあった。

以上から、日本人学生と留学生は、相互に影響を及ぼし合い、学習を面白く楽しいものにしていたことがわかる。

3.2.2. よい

抜き出した表現のうち、40個に「良かった」「勉強になった」「参考になった」「ためになった」「有意義だった」などの活動を肯定的にとらえている記述が毎回見られた。

日本人学生からは「留学生と実際にディスカッションする機会はあまりなく、貴重なのでとてもよかった。」「たくさんの人の意見が聞けてとても参考になった。」「普段なら一緒にならないような人とも話し合う機会ができてよかった。」など、留学生とだけではなく、他の日本人学生とでも意見を交換する機会が持てたことを高く評価しているコメントが多かった。

また、日本人学生からは「ほかの授業ではディスカッションの機会があまりなかったので、様々なテーマについて話し合いができたことは、とてもいい勉強になった。」「毎回の授業で新しい発見があり、ディスカッションも堅苦しいものではなく楽な気持ちで取り組めたし、自分の意見もいいやすかったし、自分では気が付かないような考えや意見を聞くことができ、とても勉強になりました。」というコメントが多い。留学生からも「日本人といろいろなことについて話せてよかった」というコメントが多く寄せられた。

このように、授業にディスカッションを取り入れたことへの評価が高く、話し合いの場で様々な考え方を聞くことによって、相互の理解が進んでいったのではないと思われる。

3.2.3. 驚き

「驚いた」「びっくりした」「ハッとした」「意外だった」「新鮮だった」など、驚きを示す記述が36個のコメントに見られた。これらは、ほとんど毎回見られ、特に、ステレオタイプや常識などについてのグループ討

論時に見られた。

日本人学生のコメントには、「宮教に留学生が100人もいたなんて本当に驚きました。」「日本にいる外国人の数は200万人と私の予想をはるかに超えていた。」など、本学の留学生や日本在住の外国人数の多さに驚いたというものが多い。

また、「自分たちが持つ日本のイメージはあまりよくないものばかりだったけれど、外国人から見た日本のイメージの中にはいいものもあったことに驚いた。」「外国人から見た日本像と私が考えていた像とだいぶ

差があって驚いた。」「アメリカに対するイメージを取り上げると、日本人はよいイメージを抱いているのに、ほかの国の留学生はあまりよいイメージを持っておらず、なぜ日本人はアメリカ人が好きかと聞かれたことに驚きを感じた。」など、日本人学生と留学生の持つイメージが大きく異なるところに着目したものがあつた。

その一方で、「1人1人の持つイメージは異なるはずなのに、大体一緒に驚いた。」「自分が思っていたよりも自分が思う常識という考えが他の国の人も同じだったというのが意外だった。」「常識について改めて考えてみて、日本と韓国の常識には共通するものが多いなと感じた。」のように、日本人学生と留学生とに共通する部分の多さに注目したコメントも見られた。

そのほかには、「今まで異文化を考えるとときは西洋や中国が主だったので、台湾のことを話し合っていることが新鮮に感じる。」「今まで反日や竹島問題についてあまり関心がなかったけど、知らないということ自体が反日をあおっていることを初めて知って、ショックでした。」などが挙げられた。これから、日本人学生が留学生の生の声を聞くことによって、これまで知らなかったことに気づかされていたことが分かる。

留学生だけではなく、日本人学生同士で接することによっても、驚きの発見もあるようである。例えば、「男だから力仕事、のような枠にとらわれたり、決め付けないという意見の人がいて、そのとおりだなと感心してしまいました。普段やってしまうことの中にも決め付けはあると思ったので、改めて口にされてはっとなりました。」などである。

3.2.4. 共感的態度

ジェスチャーだけで仲間を探す、母語以外の言語で

ストーリーを作成するなど、言語が自由に通じないという場面を実際に体験する中で、留学生や外国人の気持ちを味わった、すなわち、共感を覚えたという記述が、14個に見られた。

ジェスチャーに関しては、日本人学生から、「簡単な言葉でも声にしなないとこんなに大変なのかと思いました。」「ジェスチャーだけで伝えることがこんなに大変だとは思っていませんでした。言葉の通じない国に行ったらこのような状況になるということを実際に体験できて面白かったです。」「ジェスチャーだけではがゆい感じがした。この感覚は自分が外国に行ったときに感じるものと近いかもしれないと思いました。」など、言葉が通じない場合に感じることを、留学生や将来海外にいる自分の姿に重ねることで、思い通りにならない気持ちを理解しようとしていた。

一方、ストーリーの作成では、「ストーリー作りで感じたもどかしさを留学生は常々感じていることを忘れないようにしようと感じるとともに、自分が留学する際には覚悟しなければならないと思った。」「留学生のみんなは日本語がとてもうまいけど、母国語と違う言葉を話すということは、そう簡単なことではないと思った。」「自分自身は英語をいかに簡単に短文で伝えられるかに気をとられて思うように話せなかった。いつもこんな状況の中頑張っている留学生を改めて尊敬した。」のように、日本語が上手に見える留学生でも日々苦勞しているのだということを実感したコメントが多かった。留学生のチューターをしている学生のコメントには、「私が知っている留学生はみんな日本語がべらべらなので、何年もこっちで生活をしていると言葉で悩むことはないのかなと思っていただけど、やっぱり今もいろいろな問題を抱えているのだということが分かり、よかったです。チューターのときにも気をつけようと思います。」と、留学生がかかえている困難にも配慮しようという姿勢が見られた。一方、留学生からは、「日本人は日本語があまり上手じゃない外国人にとって毎日のコミュニケーションが本当に難しいという問題についてあまり考えたことがなかったかもしれないので、とてもいい活動だったと思う。」のように、日本人学生に留学生の気持ちを理解してもらったことを評価するコメントが見られた。

以上より、日本人学生は、留学生が現在日本で体験している困難を疑似体験することで留学生の気持ちを

理解していた。このことは、今後異文化の人を心理的に理解していこうとすることにもつながっていくのではないだろうか。

3.2.5. 自己認識

他者との関わりの中で、自分自身や自分の文化について認識するとともに、理解が深まったというコメントが11個に見られた。

日本人学生からは、「自分はとても凝り固まっていたことが分かった。」「自分に固定観念があることをすごく感じた。」「自分の思い込みに流されて、現実を認識せずに満足していたことが分かった。」、留学生からは「私がいろいろなことについて持っている考えが少し狭いと感じました。またほかの人の考えた私の考えが違うと感じました。」などのように、多くの他者と関わることによって、自分自身の内面について見つめなおしたというコメントが多い。

また、日本人学生は「実際に日本人だけでなく留学生のみんなとグループワークをしていくことで、文化の違いや、むしろ自分が気づかずに持っていた自分自身の概念が浮かび上がり、異文化理解はほかを知るためだけのものではないなと思った。」「私は異文化を学ぶということで、日本と外国の習慣、考え方、捉え方の違いを学べるのかと思っていましたが、日本の中でも違いがあることが分かり、日本を良く知ってから外国を理解するということに改めて気づきました。」「異文化で自分の文化も見えてくる。」「異文化は、空気のような存在だった自分の文化の存在、重要性に気づききっかけを与えてくれるもの。」というコメントがみられた。一方、留学生にも、「日本に長くいるため、自分の母国の文化についての理解がいい加減で、自分の文化を忘れそうになっていることに気づいた。」という記述があった。

そのほか、日本人学生の「自分の意見や持っているイメージを考えることで自分自身気づいていなかったステレオタイプが見えた。」「韓国は激しい人が多いというイメージを持っていたも、実際韓国の人を見るときはそういう目で見たりはしていない自分がいる。」「自分が生きてきた19年間はまだまだ浅く、視野も狭く、知らないことがたくさんあるということを実感した。」などのコメントからは、自分自身を客観的にとらえようとしている姿勢が垣間見られる。

以上から、他者の存在によって、自分や自文化が相対比されて明確に見えてきたこと、それによって自分や自文化を客観的に分析しようとしていること、自分自身を知ることの大切さに気づき始めたということが分かる。

3.2.6. 常識や当たり前のことの再認識

常識や当たり前のことについて再認識したことを指摘したコメントが30個見られた。これらは、常識を問う直す課題や、「給食」や「修学旅行」など、日本の学校文化を外国から来た人に説明するという課題や最後の振り返りコメントに数多く見られた。

日本人学生からは、「今までは常識というものに何の疑問も持たずに生活していたけど、自分が常識と思っていたことが意外とほかの人にとって常識じゃないことがわかってショックだった。」「国によって常識って違うのかなと思っていたが、国籍はあまり関係なく、個人の考え方だなと思いました。」「思っていたよりも自分が思う常識という考えが、ほかの国の人も同じだったということが意外だった。」「日本人間でも常識の区別が違っていたことに驚きました。」など、常識を再認識するコメントがみられた。

また、学校文化の紹介では、「自分が当たり前だと思っていたことをうまく説明できなくて、今まで本当に無意識に日本のシステムに慣れていたということを改めて感じた。」「給食や修学旅行など自分には当たり前で知らない人に説明しなくちゃいけないときがとても難しいと思いました。」など、日本人学生は、留学生に説明することを通して、無意識に学んできた当たり前のことを再認識し、わかりやすく伝えることの難しさを感じていた。

振り返りコメントには、「自分が当然だと思っていることが当然ではないということがよくわかった。」「自分にとっての普通が必ずしも相手にとっての普通ではない。」などが挙げられた。

以上から、常識や当たり前のことと思ってきたことを再認識することによって、個人レベルにおいても多様な見方が存在するということに気づいたと考えられる。

3.2.7. 異文化受容の困難

異文化を受容することの難しさは9個あり、そのほ

とんどが5回目の授業で扱ったトピックに関するものであった。トピックは、山田（2001）で取り上げられているものを扱った。事例は「ある地域の中学校と小学校に、ラテンアメリカのある国から来た研修生の2人の娘が編入することになりました。ところが、小学校、中学校とも、通訳を介して面接をした校長や教頭、担任など関係の先生が頭を抱えてしまいました。それは、姉妹ともお守りのピアスをしていて、学校側がはずしてもらえないかと聞くと、国の習慣などでどうしてもはずせないと、家族全員で訴えられたからです。」というものである。

グループ討論では、様々な意見が出された。その後、クラス全体での討論も行ったが、結局、結論は一つにまとまらなかった。しかし、受講者には、とても身近なトピックで、現実的な問題として考えることができ、受け入れることの難しさを実感するものとなったようである。

日本人学生からは「違いを認めるということがなんでこんなに難しいことなのか、考えれば考えるほど分からなくなった。」や「自分の文化を文化の異なる他国に持ち込むということはそんなに簡単なことじゃないと改めて認識しました。」「国際理解が叫ばれている今日、日本も以前より国際化してきたとはいえ、まだまだ異文化間の違いを受け入れるのは難しいことなのだと感じた。」「これから日本がどう変わっていくのか、日本がその文化を受け入れていくのか、それとも外国人が日本を受け入れていくのかのバランスが難しいなと思いました。」「日本は日本で守られるべき文化があると思いますが、それは世界的・国際的に狭い認識といわれればそうだし、どこから認める・認めない、の基準もあいまいだと思いました。」などのコメントが寄せられた。

以上より、異文化を受け入れる困難さを実感していることがうかがえる。

3.2.8. 異文化の捉え直し

授業全体を振り返るコメントの中には、異文化とは何かを自分の言葉で捉え直そうというものが18個あった。

日本人学生は、「国が違うとたくさんの違いが存在するが、同時に、似ていることもたくさんあることが分かった。」「文化によって本当に様々な違いがあるとい

うことが強く実感できた。同時に個人と個人の関係がすでに異文化であるということも分かった。」「国によって文化や習慣は様々ですが、個人個人が違うということです。韓国人だからこうだ、オーストラリア人だからみんなこうだということはないと思う。」などと記述している。このことから、国が違うから違うのではなく、個人個人が違うのだと思うようになったコメントが多い。また、「違いは変なことではなく、その人の特徴なのではないかと思います。」のコメントからは、違いを否定的に見るのではなく、特徴として捉えるという見方をするようになったことが分かる。

以上より、違いは、国の違いによるものだけではなく、個人の違いによるものもあるのだと捉えていることが分かる。それは、「異文化は外国にいかねば体験できないというものではなく、日常生活の中でも体験できるものである。」というコメントにも反映されている。

3.2.9. 多様な視点

授業全体を振り返るコメントには、多様な視点を持つことの重要性を指摘するものが8個見られた。

日本人学生からは、「1つの考えにとらわれるのではなく、たくさんの方向からものの見方をするべきだ。」「異文化理解には偏った情報にとらわれない、様々な角度から見た客観的な判断が必要だ。」「いろんな人がいていろんな考えが存在するので、自分の考えだけで決め付けてはいけない。」「コミュニケーションの種類は多種多様である。」「みな違う人間だということ。」「違うことを当たり前を受け入れることの大切さ。」などが挙げられた。留学生も、「自分が認識したいように相手文化を認識してはいけない。様々な視点から認識するようにしなければならない。」とコメントしている。

以上より、異文化を理解する上で、1つの視点だけでは十分でなく、複数の多様な視点を持つ必要性に気づいていることが分かる。

3.2.10. 自分の考えを伝えること

授業全体の振り返るコメントには、自分を開く・語ることの大切さについて指摘したものが8個あった。

日本人学生には、「自分を開くことの大切さ」「相手に歩み寄って理解しようと努力することも大切だが、自分自身についてきちんと理解していないといけな

い。」「自分の考えをきちんと伝えようとするのが大事である。」「自文化も相手に伝えられるようになりたい。」などのコメントがあった。一方留学生には、「特に違う国籍、文化、歴史、習慣などを持つ人の前では、自分の意見をもっとはっきり言うべきだ。そうでないと、異文化を背景とするもの同士のコミュニケーションでは、誤解を生じることが多いと実感している。」という記述があった。

以上より、授業でのディスカッションを通して、自分自身をまず理解した上で、自分の考えを相手にきちんと伝えることの大切さに気づいていたことが分かる。

3.2.11. 相手を理解すること

授業全体を振り返るコメントには、相手への理解を指摘するコメントが7個見られた。

日本人学生からは、「興味を持つことの大切さ」「相手を良く知ろうとすることが大事」「異文化は人間同士のコミュニケーションで、相手を理解しきるのではなく、理解しようとする誠実な態度が大事である。」「異文化においては相手の文化を理解しようとするオープンな姿勢は忘れずにいたいと思う。」、一方留学生からは、「よりよく見るより悪く見ることの先入観を捨てることが一番大事だと思います。」「相手と話をしない限り、お互いの誤解は深くなるばかりである。」などが挙げられた。

以上から、日本人学生も留学生も異文化を持つ人と接する場合には、相手を先入観なく見ることに、相手に興味を持つこと、相手を理解しようとする態度が必要だと考えていることが分かる。

3.2.12. 柔軟性

授業全体を振り返るコメントからは、柔軟性を指摘するものが4個見られた。

日本人学生が、「実際の体験を通してステレオタイプを柔軟に変えていくことが大事。」「問題があっても、自分の姿勢しだいで問題が解決できる。」と指摘しているように、異文化の人と接する場合、自分のステレオタイプを柔軟に変化させていくこと、問題への対処においても柔軟に対応することが必要だと考えていることがわかる。

3.2.13. 相手文化の尊重

3.2.7. で紹介した事例において、相手文化を尊重することを指摘したコメントが5個あった。

日本人学生は「その国にいったらその国のやり方に少しでも慣れようとするのは大事なのではないか.」, 一方留学生は「ほかの国の習慣は大切だと思うから守ったほうがいいかなと思った.」「日本に来たら日本の文化のことを respect しなければなりません.」と述べている。

また、ある留学生は「『ローマにいたときはローマの人がするようにせよ』のように、今いる場所にあわせることも大事なことで、そのときには多数の人が少数の人の考えや行動を理解するまでいなくても、異なることは当たり前だという考え方も大事だと思います.」と述べている。この意見には、相手の文化を尊重することに加えて、多数派が少数派を力で従わせようとするのではなく、少数派の文化についても理解し、認めることの大切さが指摘されている。

以上より、今後、日本国内で少数派となる外国の文化を尊重し、理解していくことについて、真剣に考えていくことの必要性が示唆された。

3.2.14. 積極性

授業を振り返って書かれたコメントの中には、異文化の人と付き合っていきたいという積極性や意欲を示すものが13個見られた。

日本人学生からは、「これから多くの人々とかかわりあっていきたいと強く感じた.」「もっとたくさんの人と交流したい.」「留学生の人たちとこれからもっと仲良くなりたいです.」など、人とかかわっていきたいという積極的な態度が窺える。一方、留学生も「知っていることや知らないことについて、国の名を離れていろいろな人と話し合っていきたいと感じた.」のように、話し合うことの重要性を感じていることが分かる。

また、日本人学生は、「外国から来た人々と接するときどうしても失敗を恐れて積極的になれないので、変えていきたいと思う.」「この授業やほかの授業を通してコミュニケーション能力を上げていきたい.」「自分を知り、相手を知り、違いを認めることのできる人になりたい.」などとコメントしている。

一方、留学生は、「自分が言いたいことはたくさん

あるのにそれができないというのはすごくつらい. もっと頑張りたいと思った.」「外国語はどれぐらいが んばっても結局母語をしゃべるときの安心感はないので、日々外国での生活に苦しさを感じますが、頑張りたいと思います.」と述べている。

以上より、日本人学生も留学生も、自分自身を向上させたいという強い積極性を示していることが分かる。

3.2.15. 日本への理解

日本や日本人への理解が促進されたというコメントは、8個あり、留学生にのみ見られた。

「日本の教育制度について理解できました.」「日本のいろいろな文化がわかった.」のようなコメントからは、日本人から直接話を聞くことで、日本に対する理解が深まっていたと考えられる。

また、「今まではどこにいても、あなたの国はどうですかと一方的に質問を受けることが多かったが、この授業では日本の文化に見られる特徴、日本人の考え方などを聞くことが出来て、改めて日本という国を考える時間になった.」という意見があった。これからは、日本人学生と率直な意見交換をすることで、日本や日本人について改めて認識し、考え、理解を深めたものと思われる。

最後に、「日本人の心がオープンではないと思っていたが、それは人によって違うことがわかった.」からは、日本人に対して持っていたステレオタイプが、多くの日本人との話し合う中で、修正され、変化していったということがわかる。

以上より、留学生にとって日本人学生と共に学ぶことは、日本や日本人を理解する上で大変貴重な機会であったと思われる。

4. まとめ

3に示したように受講生のコメントは、①面白い、②よい、③驚き、④共感的態度、⑤自己認識・自己理解、⑥常識や当たり前のことの再認識、⑦異文化受容の困難、⑧異文化の捉え直し、⑨多様な視点、⑩自分の考えを伝えること、⑪相手を理解すること、⑫柔軟性、⑬相手文化の尊重、⑭積極性、⑮日本への理解、の15項目に分類することができた。

このうち⑤を除いた14の項目は内容の面から、さらに、「感情」(①～④)、「認識」(⑤～⑧)、「スキル」(⑨～⑭)の3つにまとめることができる。

まず、「感情」は、異文化と接することによって生じた心の動きである。日本人学生と留学生は、共に学ぶことで、交流することの楽しさや様々な発見による驚きも感じていた。それは、授業中の活動を好意的に受け止め、積極的に学ぼうという姿勢にもつながっていた。また、討論を繰り返すことによって日本人と留学生の違いが際立つのではなく、双方には共通点が多いこと、同じ日本人であっても、共通点があれば相違点もあることに気づいていった。さらに、日本人学生が異文化で暮らす留学生の置かれている立場を疑似体験することを通して、留学生を心情的にも理解しようとする共感的な態度も見られた。

次に「認識」は、他者とのかかわりの中で、自分自身や自文化についてみつめ直し、それを客観的に分析することである。特に、異文化では、これまでの常識や当たり前のことが通用しないことを知り、一つの見方だけでなく、様々な見方が必要なことに気づいていた。しかし、それを頭では理解できても、実際に受け入れるということになると、困難を伴う。そこで、異文化とは何か、違いというのは、国だけではなく個人の違いによるものも大きいのではないかと考えが深まっていった。

最後に、「スキル」は、異文化に接する態度や対処法である。コメントからは、多様な視点や自分の考えをきちんと伝えること、相手を理解しようとする、柔軟性、相手の文化を尊重すること、積極性など、様々なスキルを身につけることの必要性に気づいていることが分かった。

以上のように、今回の授業では、受講者が大きく「感情」「認識」「スキル」の3つの面から、異文化理解について学んでいたと考えることができる。

塘(2005)は、異文化間教育の担い手として必要なこととして、感情面をも伴った心情的な他者理解、多様性の存在があるかもしれないと予測できる想像力、いままで自分が持っていた固定観念を変更できる柔軟性の3つを指摘している。

この3つを、今回の授業の成果に照らし合わせてみると、心情的な他者理解には「感情」が、多様な見方

があることを予測できる想像力には「認識」が、柔軟性には「スキル」がそれぞれ相当すると考えることができる。そして、これら3つは単独ではなく、それぞれが相互に作用し合うことで、異文化への理解を促進していくものなのではないだろうか。

以上、留学生と日本人学生が共に学ぶことによって、交流が生まれ、相互の理解が進み、異文化を3つの側面から理解しようとする態度を育てることができた。両者の存在がなければ、特に、感情面において理解を促すことが難しかったであろう。日本人学生にとっては、異文化を理解する上で、留学生という存在が何にも変えがたい存在であるということが分かった。また、留学生にとっても、日本人学生と共に学ぶことが、日本や日本文化を理解することや日本語をさらに学ぼうという意欲にもつながっていたのだと言えるだろう。つまり、両者にとって共に学ぶことが非常に有益であったと言えるだろう。

今後もこうした授業での取り組みを続けるだけでなく、学内にいる日本人学生と留学生とが出会う場やきっかけを創出し、お互いに理解し合える楽しさを実感してもらいたいと考えている。

7. 今後の課題

今後の課題をいくつか述べる。

まず、受講者にさらなる気づきを促すために、体験的な内容をもっと増やす必要がある。また、内面まで深く掘り下げて振り返りをしてもらうためには、コメントシートを工夫するなどの必要もある。さらに、ディスカッションスタイルの授業への評価は高いが、「話す人と話さない人に分けられている感じで少し残念でした。」「ちょっとおしゃべりに走ってしまう人が多かったと思う。」「グループのメンバーによっては全く意見が進まなかったです。意見が出なかったりで……」など問題点も指摘されており、話し合いが効果的に進むように、教師が介入するなどの、何らかの工夫考えていきたい。

また、日本人学生がこの講義の後で、積極的にいろいろな人とかかわるようになったのかどうかについては、追跡調査を待たなければならない。ただ、この講義を通じて得た体験を、日本人であれ外国人であれ、コミュニケーションに役立ててもらえれば幸いであ

る。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、貴重なコメントをくださった2003～2005年度の「異文化間教育論」受講者の皆さんに感謝いたします。

ク』三修社

山田 泉 (2001)『異文化間コミュニケーションと日本語教師』『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, 198-209.

(平成17年9月30日受理)

文 献

- 朝日新聞「言葉の壁越え入学」(2005年4月25日)
- 有田佳代子 (2004)「留学生と日本人学生の相互交渉創出の試み」『敬和学園大学研究紀要』13, 129-147.
- 尾崎明人 (2001)「日本語教育はだれのものか」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社, 3-14.
- 金田一秀穂 (2003)『新しい日本語の予習法』角川書店
- 月刊日本語編集部編 (2005)「日本で働く外国人はなぜ増える?」『月刊日本語』6月号, 4-5.
- 財団法人国際交流協会編 (2003)『留学生家族支援ガイドブック 日本的小学校』仙台国際交流協会
- 田尻映像ほか (2004)『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房
- 徳井厚子 (2002)『多文化共生のコミュニケーションー日本語教育の現場からー』アルク
- 得丸智子 (1998)「留学生と日本人学生による作文交換活動ー構成的エンカウンター・グループを応用してー」『日本語教育』96号, 166-177.
- 塘梨枝子 (2005)「異文化間教育の担い手としての保育者の行動変容ー他者と『つながる』きっかけとは何かー」『ひとを分けるもの・つなぐもの』ナカニシヤ出版, 157-190.
- 入国管理局「平成16年末現在における外国人登録者統計について (概要)」<http://www.immi-moj.go.jp/>
- 星野欣生 (2003)『人間関係トレーニング』金子書房
- 箕浦康子 (2000)「日本人学生と留学生ー相互理解の仕掛けをどのようにつくるかー」『留学交流』1月号, 10-13.
- 宮城教育大学 (2005)『大学概要』宮城教育大学
- むさしの参加型学習実践研究会 (2005)『やってみよう「参加型学習」! 日本語教室のための4つの手法ー理論と実践ー』スリーエーネットワーク
- 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査 (平成16年度) の結果」
<http://www.mext.go.jp/>
- 八代京子他 (1998)『異文化トレーニングーボーダレス社会を生きるー』三修社
- 八代京子他 (2001)『異文化コミュニケーションワークブック』三修社